

上田市立美術館 コレクション展
「大版画」リトグラフの世界 出品目録

会期：2018/8/7(火)～8/19(日)

番号	作者	作品名	制作年	種別・材質	寸法(縦×横)	所蔵
1	三栖 右嗣 <small>みす ゆうじ</small>	林檎のある風景	1980年	リトグラフ・紙	111.0×235.0cm	上田市立美術館
<p>1927（昭和2）～2010（平成22）年 洋画家 神奈川県出身</p> <p>東京藝術大学卒。沖縄国際海洋博覧会・海を描く現代絵画コンクール展にて、《海の家族》で大賞受賞（1975）。翌年には、《老いる》で安井賞を受賞。色鮮やかで精緻な写実絵画が脚光を浴びたが、墨画でも優れた作品を発表した。</p> <p>この《林檎のある風景》は、埼玉県大宮市（現さいたま市）の工場で完成したばかりの大型リトグラフプレス機で初めて制作されたもの。森工場の完成以前に、工場内という厳しい環境で挑んだ大版画であるが、困難な墨の濃淡表現を克明に写し取ることに成功した。</p>						
2	岡本 太郎 <small>おかもと たらう</small>	風	1980年	リトグラフ・紙	102.5×161.0cm	上田市立美術館
<p>1911（明治44）～1996（平成8）年 現代美術家 神奈川県出身</p> <p>漫画家・岡本一平と歌人・かの子の長男。一家で渡欧し、パリのソルボンヌ大学で哲学・社会学などを学ぶ。ピカソの作品に衝撃を受け、滞欧作《痛ましき腕》などで二科賞受賞（1941）。縄文土器の美術的再発見、大阪万国博覧会シンボルタワー《太陽の塔》のデザインなど幅広い文化活動で知られる。</p> <p>《風》は、同じく森工場で刷られた《黒い太陽》と共に、1980年にパリで行われた日本の現代版画展に出品された。</p>						
3	池田 満寿夫 <small>いけだ ますお</small>	宗達讃歌(天) <small>そうたつさんか(てん)</small>	1985年	リトグラフ・紙	95.5×462.0cm	上田市立美術館
<p>1934（昭和9）～1997（平成9）年 版画家 長野県出身(旧満州生まれ)</p> <p>長野高等学校卒。版画家・瑛九の勧めにより多色刷銅版画を始め、東京国際版画ビエンナーレ展入選（1957）、同展文部大臣賞受賞（1960）。1966年には、版画家としては最高権威のヴェネツィア・ビエンナーレ展版画部門国際大賞を、日本人としては棟方志功に次いで受賞した。作家、陶芸家、マルチ文化タレントとしても広く知られる。</p> <p>陶芸を始めてからは日本的なモチーフを描くようになるが、そうした作品の多くで、奥行ではなく天と地の広がりを目指した平面的な画面にするため、横に展開していく構成を意図している。</p>						
4	大沢 昌助 <small>おおさわ しょうすけ</small>	縞 <small>しま</small>	1981年	リトグラフ・紙	90.0×181.0cm	上田市立美術館
<p>1903（明治36）～1997（平成9）年 洋画家 東京都出身</p> <p>東京美術学校（現・東京藝術大学）で藤島武二に師事。県歌「信濃の国」作曲者・北村春季の娘婿。二科展において二科賞を受賞（1942）、翌年会員に推挙される。戦後、二科会再建時の創立会員。多摩美術大学教授（1954-1969）。東京都庁の都議会本会議場前ロビーの壁画を制作（1991）。</p> <p>独自の抽象表現をもつ作家であるが、幅の広いベタ塗りのラインは版画にするには難しい。この作品では、均一に盛られたインクの、ブレのない線そのものが画面の無機質さと呼応している。</p>						
5	竹田 鎮三郎 <small>たけだ しんざぶろう</small>	追憶の追憶	1982年	リトグラフ・紙	106.0×186.0cm	上田市立美術館
<p>1935（昭和10）年～ 洋画家 愛知県出身</p> <p>東京藝術大学卒業の年に、第1回東京国際版画ビエンナーレ展に入選（1957）。メキシコで活躍する恩師・北川民次の影響から、1963年にメキシコへ渡航。以来、在住。メキシコ青年版画展第一席（1964）、第1回全メキシコ絵画コンクール州賞第二席（1969）。</p> <p>メキシコの生活や祭祀をリズムのあるデフォルメ調で描いたり、自然や人々の肉体を力強く描いたり、幅広い表現によって世界的に人気を得ている。</p>						

番号	作者	作品名	制作年	種別・材質	寸法(縦×横)	所蔵
6	菅井 汲 すがい いくみ	空間(側面)	1983年	リトグラフ・紙	103.0×228.5cm	上田市立美術館
<p>1919(大正8)～1996(平成8)年 洋画家・版画家 兵庫県出身</p> <p>大阪美術学校に通った後、1937年に大阪阪急百貨店で商業デザインの道に就き、グラフィック・デザイナーとして活躍。1952年に単身で渡仏。象形抽象作品を描くようになり、当初はアンフォルメル(無定形)の影響を受け動的でダイナミックな作品を発表していくが、1963年頃から無機質な幾何学的形態による作風に変化。更に1970年代からは、円や直線など、より規格化した記号的なフォルムを描くようになる。</p>						
7	島田 章三 しまだ しょうぞう	三人採花 さんにんさいか	1985年	リトグラフ・紙	151.0×114.0cm	上田市立美術館
<p>1933(昭和8)～2016(平成28)年 洋画家・版画家 神奈川県出身</p> <p>東京藝術大学卒。在学中に国画会展に初出品、国画賞を受賞(1957)。1966年、新設の愛知県立藝術大学に専任講師として勤務、後に同大学の学長(2001 - 2007)となる。1972年頃からキュビズムに影響を受けた独自の人物表現<かたちびと>を確立する。人物を個々の人としてではなく、「形」として還元した空間を構成しながら、自身の体験や記憶を投影する絵画表現は、立体派の形式を「日本人の言葉で翻訳」したものとして展開されていく。1999年に日本藝術院賞を受賞、藝術院会員となる。文化功労者(2004)。</p>						
8	智内 兄助 ちない きょうすけ	雪の盆	1988年	リトグラフ・紙	111.0×232.5cm	上田市立美術館
<p>1948(昭和23)年～ 洋画家 愛媛県出身</p> <p>東京藝術大学大学院修了。1980年代初めから、和紙にアクリル絵具という独特な画法を確立し、日本画と洋画との境界を越えた革新的な表現方法に到達。日仏現代美術展(1978)、デッサン大賞展(1985)、安井賞展(1987)等々で受賞を重ね、現代画壇を代表する画家として揺るぎない地位を築いている。</p> <p>この《雪の盆》は、雁皮刷りという手法を用いている。本紙に雁皮という極めて薄い和紙を貼った状態で刷る版画技法で、版の細かい調子まで写し取ることができ、和紙の地の色が出ることで作品の雰囲気に変化がつく。</p>						
9	アンドレ・ブラジリエ	ルーペーニュの騎士達	1987年	リトグラフ・紙	114.0×169.0cm	上田市立美術館
<p>1929年～ 画家・版画家 フランス出身</p> <p>パリ国立高等美術学校で学ぶ。ローマ賞絵画部門グランプリ受賞(1953)。サロン・ドートンヌはじめ、サロン・デ・チュイルリーなどの委員となる(1962)。東山魁夷との親交も厚く、東山が壁画制作中の唐招提寺に招いたこともあった(1977)。馬をモチーフとした情緒的な作風をもつ。</p> <p>森工房には1984年に初めて訪れたが、「下図をコピーするつもりはない。リトはコピーではない」と話し、刷り上がった校正を見てはサンドペーパーで版を削るなどして削除、加筆を繰り返す制作模様であったという。森工房滞在中、新聞記者に「単純さが要求されるリトグラフは絵画の出発点にあると思う」と話した。</p>						
10	東山 魁夷 ひがしやま かいい	濤声 どうせい	1994年	リトグラフ・紙	63.5(59.0)×664.0cm	上田市立美術館
<p>1908(明治41)～1999(平成11)年 日本画家 神奈川県出身</p> <p>東京美術学校卒業後、ドイツに留学。第3回日展で《残照》が特選(1947)。日本藝術院賞受賞作《光昏》(1955)など、平明・単純化された画面構成の作風をもつ。東宮御所、皇居新宮殿などに壁画を描き、白馬シリーズの人気と併せ国民的画家となる。</p> <p>《濤声》はもともと唐招提寺御影堂内の襖絵であり、東山が10年以上かけ描き上げた作品である。御影堂の中という環境で、外光だけで見た原画の印象を再現するため、校正刷りの段階ではなかった湿度を含んだ光のような薄白緑の色を全体に引くことにした。原画とリトグラフの関係性を考える上で興味深いエピソードである。</p>						

11	ジャン-ピエール・カシニョール	午後の森	1988年	リトグラフ・紙	117.0×220.5cm	上田市立美術館
<p>1935年～ 画家・版画家 フランス出身</p> <p>ジャン・スヴェルヴィに師事し、恩師が教鞭をとるパリ美術学校に入学。若くしてサロン・ドートンヌ会員に推挙される(1959)。世界各地で個展を開催。東京国際形象展に出品(1966)。1967年に初めてリトグラフを制作し、初の版画展を東京・三越で開催する(1969)。優美でエレガントな雰囲気的女性像で世界的に知られる。</p> <p>主版の刷り上がりに応じて色彩の構成を決めていくスタイルで、《午後の森》制作においても墨刷りの主版の上に色版を重ねていく方法をとった。</p>						
12	ベルナルド・カトラン	赤と金の着物のラシエルと色クッション	1998年	リトグラフ・紙	113.0×235.0cm	上田市立美術館
<p>1919～2004年 画家・版画家 フランス出身</p> <p>国立高等装飾美術学校卒。油彩画・版画を制作し、シャガール、ピカソ、ミロらとともに評価される。日本をたびたび訪れ、パリで俳諧十選展を開催するなど(1983)、日本文化への造詣も深い。作風としては、花瓶や鉢植えの花をモチーフにした作品が多い。レジオン・ドヌール勲章受章(1995)。</p> <p>カトランは版画制作において、同じ赤でも少しずつ調子の違う色を一版一版重ねていく手法を用いており、単純な画面構成ながら深みのある空間を描いている。</p>						

【同時展示】 山本鼎が見据えた「版」による絵「画」表現

	作者	作品名	制作年	種別・材質	寸法(縦×横)	所蔵
山本 鼎	やまもとかなえ	漁夫 ぎよふ	1904年	木版・紙	22.1×17.3cm	上田市立美術館
<p>創作版画の出発点と捉えられている作品。1904年に雑誌『明星』で発表。画家・石井柏亭に「友人山本鼎君木口彫刻と絵画の素養とを以て画家の木版を作る。刀は乃ち筆なり」と紹介され、その自画自刻の版画は「刀画」と呼ばれる。サクラ材板目版木を墨で黒く染めたところからはじまり、コマスキ(U字型のノミ)をまっ黒な版面に自由にはしらせた、という《漁夫》制作であるが、彫り跡は生き活きとしており、画面が描き出されていく光景を捉えることができるようである。</p>						
山本 鼎	やまもとかなえ	ブルターニュの小湾	1913年	木版・紙	22.7×31.8cm	上田市立美術館
<p>作品裏面には1946年夏に書かれた自筆文が貼付されている。</p> <p>「此版画はむろん私の自刻自摺の木版画であります。</p> <p>これを作つたのは大正二年の夏(西暦千九百十三年)巴里留学中の友人数名とブルタアニュ半島へ旅行した時の記念の仕事でありまして、林檎酒をとるりんごの畑と麦畑と入江で彩られた明るくて寂しい海村です。あの辺は第一回の欧ロツパ大戦争はまぬがれたが、今度の第二回大戦ではメチャメチャになつたでせう。此版画を作つた郷土も、作つた私が生存する日本も共に敗戦の結果半亡国的の天地となりました。今昔の感にたえませんーこれは私の三十二才の時の作であります。」</p>						
山本 鼎	やまもとかなえ	ブルトンヌ	1920年	木版・紙	36.9×28.4cm	上田市立美術館
<p>この作品は、山本がブルターニュに滞在していた時に描かれた水彩画が元になっている。画稿の段階では、女性の後方に船のマストや波などが描きこまれている。しかし版画ではそうしたものは全て省かれ、真っ直ぐな水平線と曇気楼のような白い線が人物を際立たせている。奥行を排した平面的な画面構成は印象派の影響か。</p> <p>版木は上田市立美術館所蔵。</p>						
山本 鼎	やまもとかなえ	高原の路	1918年	ジंक凸版・木版・紙	22.2×31.4cm	上田市立美術館
<p>鼎は、フランスから帰国する際モスクワに立ち寄っているが、そこで出会った老製版工を日本に連れ帰っている。</p> <p>《高原の路》には金属凸版の技術も用いられており、その製版工との共同制作をしたものではないかと考えられる。鼎の周りには銅版や石版を扱う作家も多く、創作版画黎明期には、あらゆる技法を取り込んでいた様子が見える。</p>						